

2022年9月に実施された噴火湾沿岸の環境調査結果のうち、森（9/1, 9/21）、八雲（9/21）、虻田（9/8, 9/27）、伊達（9/26）の水温・塩分の観測結果をとりまとめました（本情報は函館水産試験場のHPからもご覧頂けます <http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/hakodate/>）。

【水温・塩分の特徴】 30m以浅の水温は13.1~21.3℃、塩分は31.4~33.8で、9月前半の森を除き、鉛直方向の変化が小さくなりました。9/9-10の調査船調査で湾内中層に津軽暖流水（水温6℃以上、塩分33.6以上）の流入が確認されており（噴火湾環境情報No. 7参照）、沿岸域の調査においても9月後半の虻田と伊達で津軽暖流水が確認されました。

【有害植物プランクトンの出現状況】 9月8日の虻田の水深0mで有害赤潮プランクトンのカレニア・ミキモトイが1mLあたり2細胞確認されましたが、9月後半には確認されませんでした。この出現量では、ホタテガイ等の水産生物への悪影響は想定されません。

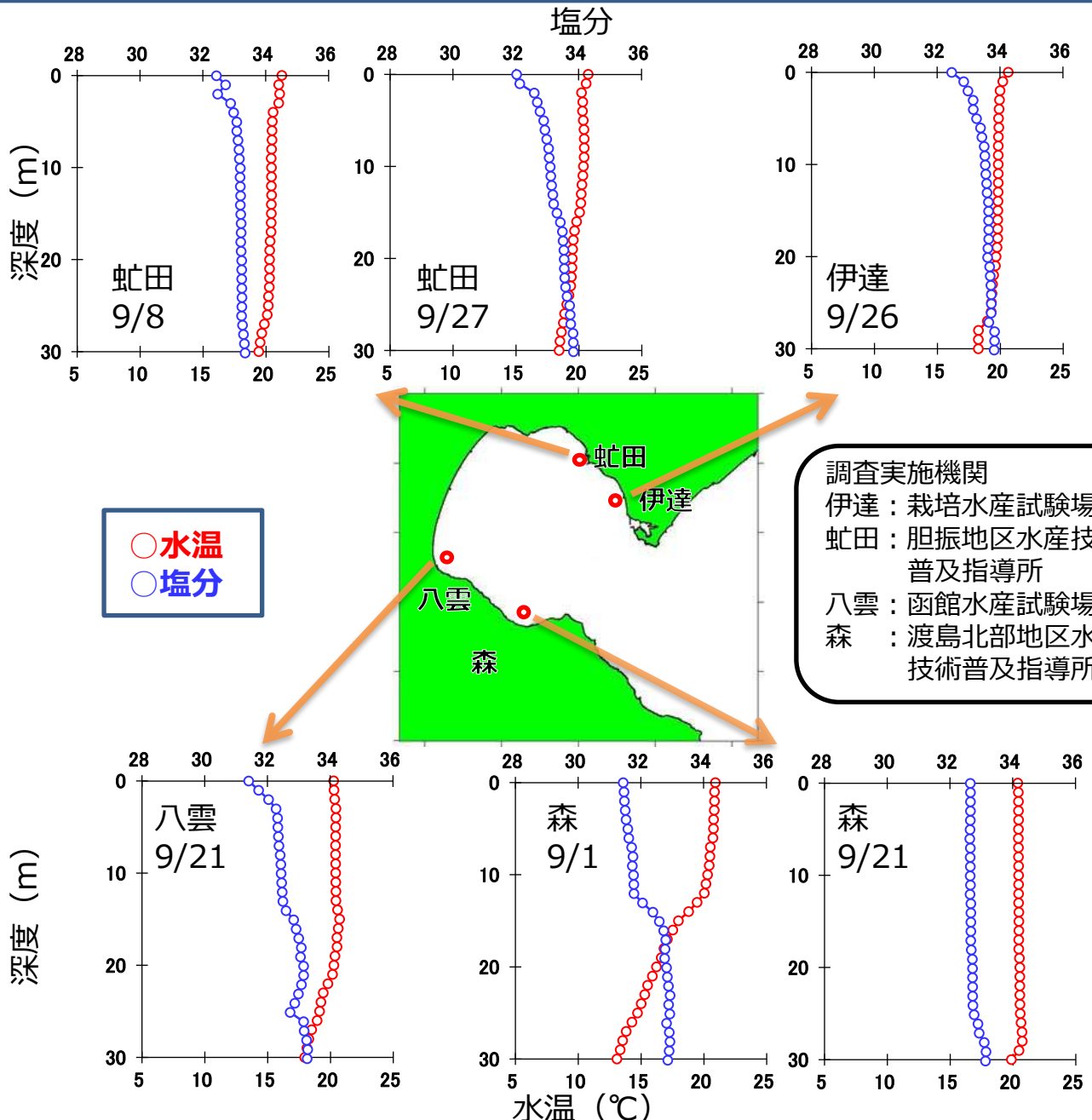
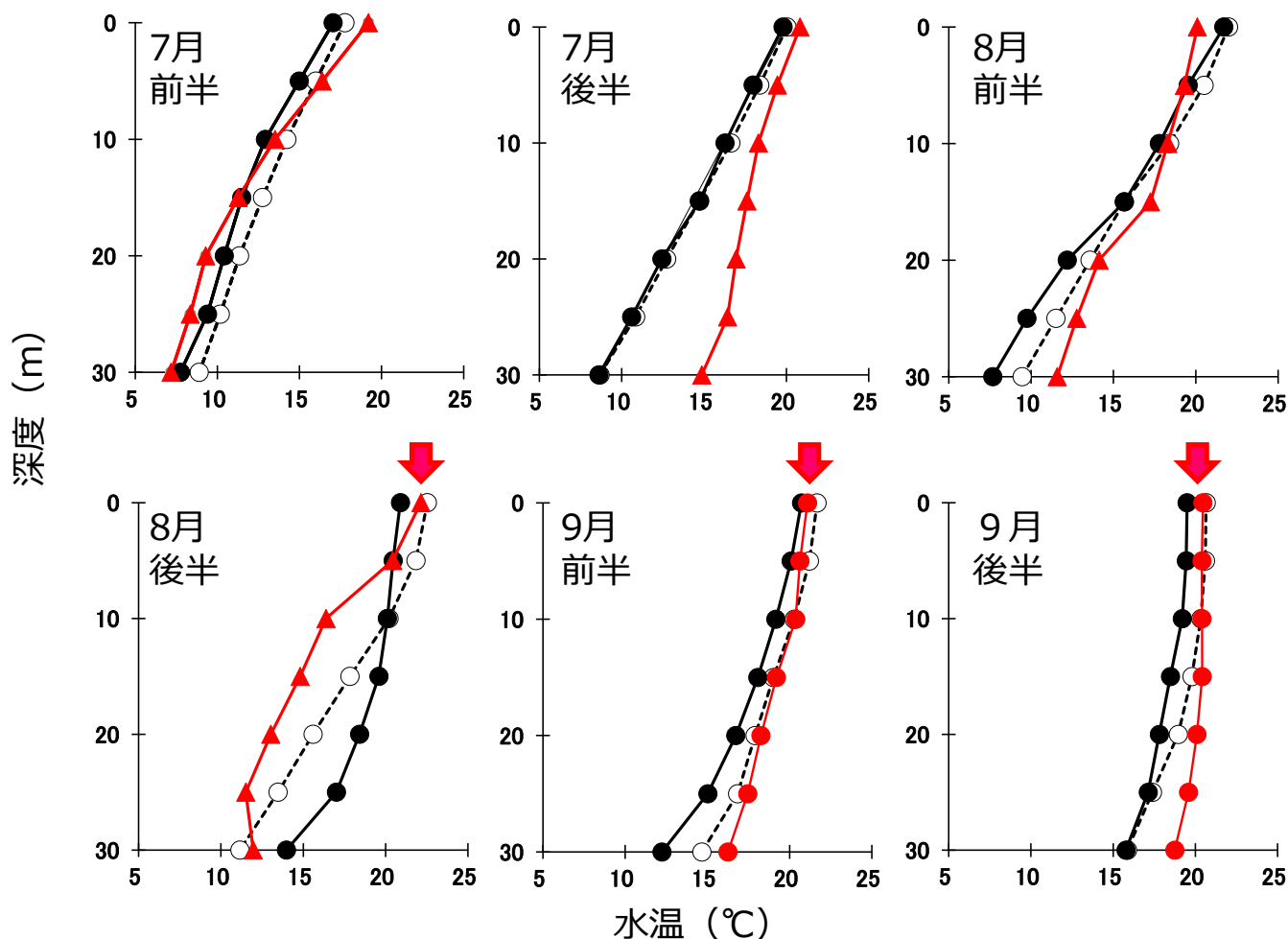


図1 噴火湾沿岸の水温・塩分の鉛直分布

※本調査の一部および情報配信は北海道ほたて漁業振興協会からの委託研究により実施しています。

【養殖ホタテガイの「稚貝のでき」と夏季の環境条件の関係】 夏季の水温の鉛直分布について、「稚貝のできが良かった年」と「稚貝のできが悪かった年」を比較すると（図2），稚貝のできが悪かった年は8月後半の水温の深度差が小さくなり，9月の水温が全層的にやや低くなる傾向があります。

【今年の夏季の環境条件】 今年の8月後半から9月にかけて「稚貝のできが良かった年」と似た特徴が見られます（赤矢印）。ただし，昨年は「稚貝のできが悪かった年」と似た環境の特徴が見られたにも関わらず，実際の稚貝のできは良くなりました。このように「8月の成層の強弱」や「9月の水温の高低」だけで「稚貝のできの良否」を完全に予測できるとは言えません。今後もできるだけ稚貝にストレスを与えない作業・管理を心がけてください。また，本分散の時期を早めること，本分散の密度を少なくすることは，稚貝のできをよくすることに効果があります（噴火湾環境情報No. 6を参照してください）。



○稚貝のできが良かった年 ●稚貝のできが悪かった年 ▲2022年

図2 噴火湾沿岸の夏季の水温鉛直分布
2010年～2021年，虻田，八雲，森地区の1～2回/月の観測結果を各年各月の前後半の深度別に集計した。「稚貝のできが良かった年」および「稚貝のできが悪かった年」の平均値を示しています。